

「一山土心水師」をめぐる

門屋 温

『江談抄』に次のような一節がある。

又云ふ。「弘法大師如意宝珠・納札銘」に云はく、「一山精進峯竹目々底土心水師道場」と。此の一文、未だ読めずと云々。⁽¹⁾

この判じ物の意味するところが、「一山」が正確には「一室」で「室生」の二字のそれぞれ上下を採ったものであり（現在は「べんじつさん」と訓んでいるが、当時は「しつせん」と訓んでいたらしい）、「竹目々」が同じく「竹木目」で「箱」の字を分解したもの（この誤りから「ちくもくもく」と訓まれていたらしい）がわかる）、「土心水師」がやはり「堅恵法師」の部首を採った略であることは、現在ではよく知られたことである。かの碩学大江匡房をしても読めないと言わしめたように、この文の判読は東密の学匠のみに伝えられた秘伝であった。しかも、この文句が本当に意味するところは、判じ物が読めただけでは解けたことにはならない。「一山土心水師」とは、実は弘法大師と如意宝珠をめぐる秘説へと導く扉を開ける呪文なのである。

—

さて、その秘説の世界に分け入る前に、まずは匡房がこの文句にどこで出会ったのか、その出拠を見ておこう。それは弘法大師空海の『御遺告』である。『御遺告』とは空海がその死に際して弟子達に遺した遺言のことをさし、現在まで『遺告二十五ヶ条』『遺告諸弟子等』『太政官符案并遺告』『遺告真然大徳等』の四種の『御遺告』が伝わっている。⁽²⁾これら四種の『御遺告』は近代に入るまで真撰と信じられてきたが、現在ではすべて偽作と見るのが定説である。その成立時期は一度ではなく、四種が順次成ったと見られる。四種の先後関係については諸説があるものの、『遺告二十五ヶ条』が最初であるといつのが大方の見方であり、おそらく十世紀末頃には成立していたと思われる。⁽³⁾本稿では『御遺告』そのものの成立の問題や内容にまで深入りする余裕はないので、原則として『御遺告』と一括した場合の『遺告二十五ヶ条』をさすこととする。

『御遺告』では全二十五条のうち、次の四ヶ条に「土心水師」の名が見える。

「輒く伝法灌頂阿闍梨の職位并に両部の大法を授くべからざる縁起第二十一」

（金剛薩・が龍猛菩薩に告げたという非器の者に授けることを戒めた秘密の文を引用した後）是の章句は梵本に在り。經文并に儀軌の外より取り離し出して密かに納むるところなり。吾が三衣箱の底に納め置けり。また精進の峯の入室の弟子沙門土心水師がところに在りと云々

「一山土心水師が建立する道場に朔毎に避蛇の法三箇日夜修すべき縁起第二十三」⁽⁴⁾

それおもんみれば、避蛇の法呂はこれ凡の所伝にあらず。金人の秘要なり。阿闍梨の心肝口決なり。東寺代々の大阿闍梨、彼を像想て、法を修せよ。すなはち後夜毎に念誦し畢りて護身をなせ。道肝を精

進の峯に籠め、また本尊界会をかの岫に安せり。秘密臣は語はざれば知られず。念ひ煩ふこと千迴なり。専ら猥りに聞かしまへからず。一を得て万を恐れ云々

「東寺座主大阿闍梨耶如意宝珠を護持すべき縁起第二十四」

(如意宝珠の製作法と供養法について事細かく記し、その際唱える今の大日経にはない極秘の文句は東寺座主長者以外に伝授してはならないことを述べた後)

但し大唐の大阿闍梨耶の付属せらるるところの能作性の如意宝珠は戴頂して大日本国に渡り、名山の勝地に劣はり籠むること既に畢んぬ。彼の勝地とはいわゆる精進の峯土心水師が修行の岫の東の嶺なり。努力努力後人に彼の処を知らしむることなかれ。ここをもって密教は劫に栄え、末徒博延せむ。

「若し末世凶婆非禰等有りて密華園を破せんと擬せば心に修法すべき縁起第二十五」

それおもんみれば昔南天竺国に一りの凶婆、一りの非禰等有りて、この密華園を破りき。時に華園の門徒の中に一りの強信の者有り、奥砂子平法呂を修すること、七箇日夜。いよいよまた次々に眞度を修せしかば、彼の凶婆等自ら退きて、ために密華園安寂なりと。ここをもって末世の阿闍梨耶宜しくこの由を知りて必ず心に彼の法呂を勤め守るべし。彼の法呂は入室の弟子「一山精進の嶺の土心水師が竹木目底に在り。(以下略)

『本朝神仙伝』にも「大師の心行は、多く遺告二十一章に見ゆ、重ねては論ずべからず」と書いていることから、匡房がどこかでの『御遺告』の本文に目を通したのは間違いない。ただし「遺告二十二章」といつのが誤記でないとするれば、第二十三章以下は極秘として見せてもらえなかった可能性がある。ともかく院政期にはこのように秘書扱いられていた『御遺告』の内容も、鎌倉期にはいと次第に流布するようになり、それともなつて『御遺告勸註抄』『御遺告釈疑鈔』『御遺告口決』『御遺告伝授頭書鈔』等の注釈書が盛んに作られるようになった。それら注釈書では、当然この「土心水師」をめぐる謎にも問いが投げかけられ、さまざまな解説がなされている。

「ここではその中でも代表的な弘長二年(一一九〇)成立の頼瑜『御遺告釈疑鈔』を見てみよう。『釈疑鈔』では「一山とは何の山ぞや」「建立道場、何の処ぞや」といつ問に対して、「大和国宇田郡室生山仏龍(隆)寺」のことであり、「土心水師はかの山の南面に住す」と解き明かす。また、『御遺告』第二十四条の「但し大唐の大阿闍梨耶の付属せらるるところの能作性の如意宝珠は戴頂して大日本国に渡り、名山の勝地に劣はり籠むること既に畢んぬ」といつ文については、「御遺跡に云はく、室生山堅惠法師竹木目の底に置する如意宝珠は善女龍王の手より得たり」と。相違は如何」と、室生山に籠められている如意宝珠が、青龍寺の恵果から伝来のものであるのか、それとも神泉苑の善女龍王から受け取ったものであるのか、という疑義を提出している。室生山⁴の如意宝珠の出处に関して、二説が存在していたらしい。空海が善女龍王から如意宝珠を授かった話は『御遺告』には見えないが、第一条に神仙苑において祈雨の法を修した際、九尺の蛇の頭に乗った八寸の金色の蛇の形をした善如龍王が現れたことが記されている。また、第二十四条には、宝蔵に納められた宝珠と海底の龍王の頸の下の宝珠とが通じているという説を載せており、これらの話が結びついて善如龍王伝授説が生まれたのであろう。ちなみに高野山真別処蔵『御遺告七箇秘法』は如意宝珠法・避蛇法・奥砂子平法等七種の作法についての秘説を集めたもので、勸修寺流の秘伝をも多く載せるが、そこでは「如意宝珠・一山宝珠・竜宮宝珠は一体無二なり」と述べている。^⑤二説の相違に対する頼瑜の見解は次のようなものである。^⑥

答ふ。神仙記に云はく。唐朝より如意宝珠を齎して以て我が朝に來たり。この珠の在所並びに恵果の後身、かの宗の秘するところなり。

また善女龍王如意宝珠口伝口授に云はく。空海和尚神泉池において請雨經の法を修する時、無熱池の善女龍王来たりて所持の如意宝珠を空海和尚に奉り給ふ。その宝珠は大和国仏龍の寺にこれ有り。その寺より四町ばかり往きて大なる石五つ在り。その五の石の中に研いたる石一つ在り。その石は中破たり。石の内にかの如意宝珠を納めたり云々。この宝珠、空海大師末法の中に来たりて、仏法澆薄の時、定より出で給ひてまた重ねて仏法を弘めたまふ時取り出だし給ふべしと云々。

最初の「神仙記」は『本朝神仙伝』の引用である。結局両論併記、どちらも認めると言つてこのよつであり、如意宝珠はいつのまにか二顆に増殖してしまつた。しかし、話はこれにとどまらぬ。このすぐ後に、第三の宝珠が登場するのである。

尋ねて云はく。大師所造の如意珠は何の処に安置するや。

答ふ。実賢僧正の記に云はく。日本国に宝珠を造る人は、ただ大師・範俊・勝憲トクノミチ三人なり。御作の宝珠と五指量の愛染王とは白川院の御時、白川円堂壇の中心にこれを埋めらる云々。

すなわちこの他に空海制作の如意宝珠があつて、白河院の時に法勝寺の円堂の下に埋められたといつのである。範俊の名が挙げられていることから見て、これは例の範俊が白河院に贈つて、鳥羽の宝蔵に納められたとされる宝珠と関係があるらしい。その間の事情は、同じく頼諭の著した『秘鈔問答』に詳しく述べられているが、紙数の関係もあつてここでは触れない。ただ頼諭は『秘鈔問答』のその部分で、興味深いことを述べている。

先師僧正報恩院云はく。勸修寺の習は一顆、いわゆる門葉相承の玉これなり。精進の峯には埋めざるなり。かの峯にはただ法のみ安置する習なり。醍醐寺の習は二顆。一は恵果相伝の玉、かの峯に在り。二は門葉相伝の玉、この玉は鳥羽勝光院宝蔵にあり。すなはち大師の御作なりと云々。

つまり、醍醐三宝院流では、室生山に埋められている恵果相伝のもの、鳥羽の宝蔵にある空海制作のもの、二顆あると伝えるのに対し、勸修寺流では室生山に宝珠は埋まっていなと伝えているといつのである。これは言つてみれば『御遺告』の内容を真つ向から否定するものである。しかし実際、勸修寺流ではこのことが秘説として伝授されていた。

金沢文庫蔵の文永十二(一一三三)年記『最極秘灌頂印』は、表題に「勸修寺」とあつて勸修寺流の印信であることがわかるが、^⑥その奥には

師の口伝に云ふ。一、一山は印形なり。その空上は土心入定所なり。二空は則定恵、左右の肩なり。故僧正言ふと云々。

遺告土心水竹木目底は、則ちこれ印なり。

とあつて、「土心水師の竹木目」が印であつて、実体のない抽象的なものと見なす立場をとつていふことがわかる。勸修寺流がこのよつな秘説を伝授していた理由は、まだはっきりしないが、おそらくは如法尊勝法や如法愛染法の成立が背景にあるのではないかと想像される。如法尊勝法は如意宝珠を本尊とする国家護持の修法で、白河院の命により範俊が修したのが始めであるとされ、もとは勸修寺流独自の修法であつた。また中宮の皇子無事出産を祈念する法として有名な如法愛染法も、同じく如意宝珠を本尊とする法で、やはり範俊により始められたとされている。^⑦これら宝珠と王権を結びつける修法の創出に熱心であつた勸修寺流にとっては、鳥羽の宝蔵に秘される範俊ゆかりの如意宝珠こそが唯一無二の宝珠であつたといつてあつたか。五十六億七千万年先に取り出す玉よりも、今現在安産祈願の呪力を出す玉、観念よりも実体を指向する姿勢が透けて見えるよつな気がする。

さて話を戻して、「土心水師」は『御遺告』秘説を解く鍵を握つていふがゆえに、『御遺告』解釈の過程でそれらなる力を身につけてゆく。金沢文庫蔵の建長六年(一一三三)の奥書を持つ「一山 山階寺寛継法橋」といふ文

書には次のようである。(10)

大和国宇多郡に一勝地有り。これを室生山と号し、また精進の峯と名づく。弘法大師帰朝の時、鎮護国家済度衆生のため、かの鉄塔より以来師資相承の不三寸並びに如伊須を土心水師をしてこの地に安置せしめ、避蛇奥沙の秘法をかくす。天長地久の奉為めに已に四十九院を建て、大師は慈尊院に住し、土心は安養院に住するなり。彼之を伝来するは、金剛薩・龍猛に授け、龍猛龍智に授け、龍智不空に授け、不空恵果に授け、恵果弘法に授け、弘法土心に付し、土心この地に埋む。即ち入定して慈尊の出世を待つのみ。(中略)

かの恵果阿闍梨の碑に云ふ。先に云はく、吾と汝と宿契深し、多生中に願はくは密教を弘演し、彼れ此れ代ひに師資とならん。是の故に汝に遠渉を勧め、我が深法を授く。吾願足りぬ、汝は西土して我が足を撰り、吾は東に生まれて汝が室に入る。かの土心水師はこの山に住し、慈尊の下生を待つ。

すなわち南天の鉄塔で金剛薩・が龍猛菩薩に授けて以来相承されてきた「白銀の三寸の不動尊と如意宝珠」を空海から付属された堅恵は、それを室生の精進の峯に埋めて、自身も入定して弥勒の下生を待っている。また恵果は生前空海に向かつて「交代で師資となろう」と契約したが、空海の弟子堅恵が実はその恵果の生まれ変わりである、といつのである。「いつなるともはや堅恵は空海とほほ肩を並べる存在にまで上昇している」と言つてよい。

ところでこの恵果の再誕とまで言われる「土心水師」すなわち堅恵とは、いったいどのような僧であったのか。堅恵の伝として代表的なもののひとつである『和州室生山開山堅慧大徳伝』を見てみよう。(11)

伝燈修行賢大法師位堅慧は、もと何れの処の人といふことを知らず。大師入唐の先、抖擻して室生に相見る。語りて怪しまず、伴ひ来りて共に居す。師資の道言はずして成る。入唐に難を斉しふし、帰朝に影を同じふす。大師常に呼んで公と称す。世に慧果の分身と謂ふ。

これが近世まで一般的に信じられてきた堅恵像と言つてよいが、ここには眞実は全くなく、まるっきりの捏造であることが現在では明らかになっている。園城寺蔵『大唐国日本国付法血脈図記』には「山僧堅慧。是最澄和尚同郷。義真和尚入室。円修連枝。」とあり、しかも血脈には「最澄 義真 円修 堅慧」と記されるように、実際は由緒正しい天台僧なのである。(12)したがって堅恵に関する歴史的事実として認められるのは、叡山での抗争に敗れて室生寺に移った円修に同道して室生寺に住し、室生山仏隆寺を開創したことぐらいである。(13)空海の弟子であったことはもちろんないし、まして共に入唐したなどといつことはまったく根拠がない話であつて、「これらはおそらく後世、仏隆寺に住した真言僧たちが捏造したのである」と言われている。つまり堅恵の実体は室生山(仏隆寺)との関わりのみであつて、そこにまず空海が結びつけられ、空海が唐よりもたらした如意宝珠が引き寄せられて、室生山精進の峯は弥勒下生まで如意宝珠の籠められた山として、特別な地位を獲得したのである。『御遺告』の「土心水師」をめぐる秘説は、秘説そのものが「空海の弟子堅恵」という仮構の上に成り立っているのだと言えよう。しかもその仮構は、「土心水師」と判じ物化することによつて、巧妙に守られているのである。「土心水師とは堅恵のことだ」と種明かしをされると、誰もがそこで合点をしてしまい、堅恵の存在自体の仮構・性には気づかなかつたのである。

三

この「室生山 堅恵 空海 如意宝珠」といつ仮構の回路は、さらにまた別のバリエーションを生み出してゆくことになる。まずそのひとつが、「如意宝珠＝仏舍利」と見なす教説に基づき、「一山を仏舎利の籠められた靈地と見る立場である。最近新しく発見された資料に、金沢文庫蔵『一山龍穴安置舍利事(仮題)』なる文書がある。(14)

「一山龍穴に八万四千粒の御舍利を安置せる事

この穴の側に五輪の塔婆あり。その地輪の中に箱二重にこねあり。中の箱をば竹木目底と名づく。底と名づくるは上の箱に等しくしての爾なり。上の箱の囲には水精の軸の法華の安せらる。瓶の御舍利は一重の箱の中間に瓶を大事に安せらる。鳥居は上の箱の中に安せらる。上の箱の中に臥して置かる。この事外見あるべからず。秘すべし秘すべし

徳治二年（一三〇七）五月八日。

於金沢黒房殿宿所 口伝之

金剛資順一 在判

「」⁹では室生山の「竹木目底」に納められてゐるのは、もはや如意宝珠ではなく、法華経と瓶に入つた舍利であり、上には鳥居が置かれてゐると言つたのだ。この文書はこれだ全文の短いものであるが、『つやら有名な』⁹「山秘密記」の内容から秘説を切り出して伝授に用いたものであるらしい。そこで、『「山秘密記」を見てみることにしよう。』⁹『秘密記』ではまず冒頭、⁹「一山が密教相応の霊地であつて、そこに鎮まる三國相承の如意宝珠は神道においては天照太神にあたり、ゆえに天照太神の天の石戸はこの「一山の岩窟にほかならないと定義する。そのうえで、「大師の御遺告に曰く」として『御遺告』第二十四条の恵果付属の如意宝珠が土心水師修行の岫の東の嶺にあるといつ文句を引用しているが、それ以上土心水師についての言及はない。そのかわり、以下霊地室生山の様相について、実際に見て歩くよふな具体的な記述が続く。

宝珠御在処の事

秘記に云はく。精進峯は玉の在処なり。「一山東嶺の北に竜穴在り。南に竜池在り。中の奥に三本の石塔これ在り。件の所は宝珠の在処なり云々。秘密の重書に曰く、極秘密の口決あり云々。

彼の山に三ツの竜穴有り。東を妙吉祥竜穴と名づけ、西を遮羅夷吉祥竜穴と名づけ、中央の尾を持法吉祥竜穴と号す。此の持法吉祥竜穴の底に入ること十五丈にして五丈ノ池有り。左右に穴有り。左

の穴は最方なり。此の内に石戸有り。広さ三尺厚さ二寸。以て戸扉と為す。其の左の戸扉の面には金剛界曼荼羅有り。右の戸扉の面には胎藏界曼荼羅有り。其の裏に銘文有り。弘法大師御爪を以て書給ふなりと云々。（中略）此の内へ七尺入て大岩有り。地より一尺二寸上には方なる穴有り。広さ一尺八寸、高さ一尺五寸。此より三尺入りて独古門有り。高さ三尺、広さ二尺。是を等覚門と名づく。此より三尺入りて三古門有り。高さ四尺、等覚北門と号す。愛染王内に向ひて門の左脇に座す。亦門の右脇に花座有り。その上に迦葉仏の舍利六粒を安置す。此より三尺入りて五古門有り。高さ六尺、広さ四尺一寸。是を妙覚門と名づく。文殊五智の宝冠有り。文殊外に向ひて門内に座す。一尺入りて羯磨の上に鈴有り。此の奥に大ひなる岩自然の穴有り。宝篋印塔の形の如し。高さ一丈七尺、広さ一丈二尺。其の内に光明赫奕として異香薫馥せり。此の穴の中に水精の五輪塔有り。高さ一丈六尺。此の地輪の中に二重の管有り。中の管を竹木目代と名づく。上の管の周に水精の軸の法華経恵果御筆安せらる。中の管の内に如意宝珠を宝瓶に入れ、これを安置せらる。金札有り、銘文有り。其の上に鳥居を只伏てこれを置く。額文有り。即恵果相承ノ宝珠得頂骨承元日。その宝珠の左右に三寸の白銀の不動、五指量の黄金の愛染これを安置せらる。亦恵果相承の灌頂の印信の文、両部の大法阿闍梨位の最極伝法の密印云々。同く副へてこれを置かる。

大師の遺告の文に曰く。道肝を於精進の峯に籠め、亦本尊海会を彼の岫に安ずるなり。道肝者今ノ伝法密

印ノ事ナリ。本尊者即チ今ノ宝珠並不動愛染等鉄塔流伝ノ一仏二明王者是也

亦銘文に曰く。七重五十二粒。竜穴八萬四千粒。五重四百七十粒。已上の仏舍利八萬四千五百二十二粒なり。

此等即ち「一山安置の靈宝」、大日本国の本初なり。遺告の土心水竹木目底は則ちこの印なり。

このとおり、室生山に存在する池や岩や五輪塔などの秘所を、細かい寸法入りで説明してゆくのであるが、そのために堅恵と如意宝珠のイメージはかえって後退してしまつてゐるよふに見える。』⁹「一山秘密記」の異本と言つ

『一秘記』にいたっては、聖恵は神泉苑で金龍を自撃した弟子達の中に入っているだけで、「土心水師」なる表現自体登場しないのである。⁽⁶⁾

本来如意宝珠と仏舍利が同体であることは、『大智度論』等に根拠のあるところで、いわば当然の発想なのであるが、室生山をめぐる秘説においては、両者がむしろ乖離する方向にあるようにさえ思われる。金剛薩・以来相承されてきた如意宝珠は、恵果から空海の手に渡り、土心水師とともに室生の石窟の中に眠っている。それは弥勒下生の時に禅定より出た空海が、再びこの世を教化するために用いる「隠し玉」として、誰も見ることも触れることもない、限りなく観念に近い存在としてある。それに対して、仏舍利として説かれる如意宝珠は、途中の経路や寸法の具体性と相俟って、非常に可視的なイメージとして描かれている。ちょうどそれは、醍醐寺の勝賢が持ち出した如意宝珠を鳥羽の宝蔵に返させるにあたって、箱の中身を見した九条兼実の置文「靈宝目錄」の感触に近い。⁽⁷⁾ またそれは、事あることに引っぱり出しては数えられる東寺経蔵の仏舍利にも繋がってゆくであろう。そして「土心水師」はと言つと、あきらかに前者の、つまり観念としての如意宝珠の方に寄り添っているのである。

四

さて、もつひとつのバリエーションが、伊勢神宮をめぐるいわゆる「両部神道書」の中に登場する「土心水師」説話である。テキストとしては『神性東通記』『大神宮本地』等が挙げられる。次に掲げるのは『神性東通記』の部分であるが、同書は万葉仮名もどきに梵字を交えて書かれた、まるで暗号文のような文体であるので、『大神宮本地』を参考に漢字仮名混じり文に書き直したものである。⁽⁸⁾

去ぬる天長十年十一月十二日。深く穀味を断て、娑婆界を厭ふて、禅那の法を思惟て、承和二年正

月廿日、最後耳語の法を、崛居の土心水師に、受与し遣して、深禅定の顯と密とのところを指南し置き、
て、「余の弟子者どもに語るな、汝が口は我が口と思つしなりと言つぞ、よくよく慎め」とて、三つの巻物を授け給ふ。ひとつは我が定のところの記、残りは伝法の仕儀なり。同二月八日、両界前に念誦を始めて、草座を敷き、五鈷金剛にて、同三月廿一日に、念誦堂へ入れ奉る。それにて、日々に印の変わりけるなり。同四月八日に、入棺の儀にて奥院へ曼荼羅供の儀式にて、実恵大徳を大阿闍梨として、真雅僧正合敬をなして、余の弟子供養の物を捧げて、奥院の廟に入れ奉らんとせらるるところに、土心一巻の巻物をもて、実恵・真雅に見す。舌を巻き、息を吞んで、目をひそめて、観念すれば、金堂の等身の弥勒の像をもて、取替えて、大和の国室生の禅崛に奉納せうとするところに、幽冥忿怒の神達三十二神、相伴ふて、土心の手より受取つて、雲のごとくに飛び去りぬ。⁽⁹⁾

つまり、弘法大師空海は入定にあたって、実恵・真雅ら高弟を差し置いて、土心水師に三巻の秘書を伝授した。入定後、土心はそれを高弟たちに披露し、奥の院の廟へは身代わりの弥勒像を納め、大師は室生山の禅崛に納めようとした。すると忿怒形の三十二神が現われて、大師を連れて飛び去った、といつのである。ちなみにこの後、大師は伊勢神宮に來臨し、多賀社の下部坂に神鏡として顕れる。ここで注意すべきは、如意宝珠にはまったく触れられていないことである。前節で述べたように、如意宝珠を室生山に括りつけるための「土心水師」であったはずが、この話で保存されているのは空海と土心水師との関係のみである。もちろん伊勢神宮にまつわる説話なのであるから、如意宝珠より神鏡の方がふさわしいに決まっている。まして門葉相伝の仏舍利など神宮にとつてはきしてありがたくもない。しかし、それならばなぜ土心水師のみが保存されているのか。いっそのこと土心水師も消去して、奥の院の空海が高弟たちの手を振り切つて伊勢へ飛来してはいけなかったのか。たぶん、いけなかったのである。いくら中世でも、そんな無理は通用しないのである。空海が伊勢の高宮に入定しているといつ、ある種荒唐無稽な言説を成り立たせるためには、それを支えるだけの仮構を必要とした。すなわち「一山土心水師」が本

来備え持つている仮構性が、『十一山秘密記』冒頭にも見られた「如意宝珠 天照太神」説を媒介として、「室生山 堅恵 空海（如意宝珠 天照太神） 高宮」という新たな回路を保証する構造になっているのである。事実この説話も他の「土心水師」説話同様、秘説として伝授の水脈を流れてゆく。『天照太神口決』は嘉暦二年（一三三三）西大寺流の覚乗によって記されたものであるが、その「別社事」という項目の中に、弘法大師の入定所をめぐる「最極秘事」を書き留めた伝本が数本存在する。そこには次のようにある。⁽²⁰⁾

一、別社の事

(前略) 弘法大師御入定所、是委細別記にこれ在り。

最も極秘の事。御入定の時、奥院に送り奉るに、十人の御弟子面々に御共すと云々。但し等身の弥勒の像を造り立て奥院に置き奉り、大師の全体をば室生土心^{まむき}に納むべく仰せ置かるの間、其の旨真雅曰下思給ふる処、天の上より一人神下給て、大門を経て空に入りて見ず、今の高御前の大石の下に納め給へり。(以下略)

さきほどの『神性東通記』とほぼ同内容であることがわかる。ちなみに、室生寺の長老には西大寺の律僧が任じられるといった、強い結びつきがこの伝授の背景にはある。

『御遺告』を出発点に次々と秘説の扉を開いてきた「十一山土心水師」といつ呪文は、「こ伊勢の地でまたひとし新しい秘説の扉を開けたと言えよう。」「十一山土心水師」には、どうやらそいつが秘められているらしい。ここで用いてきたような「仮構」が、文学のついでのような意味を持つのが、正直言って、私にはまだよくわかっていない。ただ、思想が説話化するのではなく、説話が思想化するといつ視点に立つとき、この「仮構」といつ仕組みがある一定の役割を果たしているのではないかと、いつ気がしている。

(20) 川口久雄。江談證注。第四二条（勉誠社、一九八四）。底本には、「室生山精進峯竹自々底志水道場」とあるが、底本傍注および対校本によって、原型に最も近いと思われる形に復元した。もちろん同じした異同は、書写の過程で、誰もこの文の意を正しく理解していなかったことによって生じたことは言うまでもない。

なお本稿引用の資料は、すべて筆者の責任において読み下してある。読み間違い等はご教示頂ければありがたい。

(21) これにいわゆる、「御手印縁起」を加えて五種とする場合もあるが、ここでは一般的な扱いにしたがって四種としておく。なお、「御遺告」本文は旧『弘法大師全集』あるいは、『弘法大師伝全集』に記載されており、本稿の引用は『伝全集』にしたがった。

(22) 『御遺告』の成立をめくっては、白井優子。『空海伝説の形成と高野山』、武内孝善。『御遺告の成立過程について』、『印度学仏教学研究』四十三（二）、一九九五年）、拙稿「丹生都比売小考」、『東洋の思想と宗教』八、一九九一）などがある。なお、「遺告二十五ヶ条」を最初とすることは、上山春平氏を除けばおおむね諸氏の一致するところである。

(23) 「避蛇法」は小野流においては「ひゃくじやほう」と訓んだ。ときに「白蛇法」と書くのはそのためである。

(24) 高野山大学寄託真別処蔵。『御遺告七箇秘法』。ただしこの本は錯帖があつて、同じく真別処蔵の『御遺告秘決』と後半部分がそっくり入れ替わっている。

(25) 『御遺告秘疑鈔』、『続真言宗全書』第二六巻）。

(26) 『秘鈔問答』第十三（大正七九・五一九）。なおこの鳥羽の宝蔵の如意宝珠については、村山修一「如意宝珠と神道」、『金沢文庫研究』二七二、一九八三）、および阿部泰郎「宝珠と王権」、『岩波講座・東洋思想』日本思想2、一九八九）等で詳しく論じられている。

(27) 『金沢文庫古文書』仏事編、文書

(28) 如法尊勝法・如法愛染法については、上田豊城。『真言密教事相概説諸尊法・灌頂部』上・下巻（同朋舎出版、一九九〇）に詳しく解説されている。

(29) 『十一山 山階寺寛継法橋』は金沢文庫テーマ展図録「称名寺の新発見資料」(一九九四)に紹介されている。

(30) 『弘法大師伝全集』第十巻（六六新報社、一九三五）、「大師弟子伝」巻上所収

(31) 『智証大師全集』下巻（園城寺事務所、一九一八。復刻版は同朋舎出版、一九七八）。

(32) 『堅恵の事跡』には、西田長男「室生龍穴神社および室生寺の草創」(『日本神道史研究』中世編)上、講談社、一九七八）、小山田和夫「智証大師円珍の研

究』(吉川弘文館、一九九四)、仲尾俊博「円修と円珍(上・下)」(金沢文庫研究、一九七五)に詳しい。

(5)一九六八年八月に開かれた「金沢文庫の中世神道資料」展において、参考展示された『神鏡被奉崇事(仮題)』の半折の裏側に、「一山龍穴安置舍利事」なる伝授が書かれていた。

(15)成田山図書館蔵『一山秘密伝記』。

(16)『一秘記』(大日本仏教全書、第一一九巻)。

(17)『早稲田大学荻野研究室収集文書』上巻(吉川弘文館、一九九一)。

(18)この両書については、門屋温・伊藤聡「空海高宮入定関係資料について」(論叢マジマの文化と思想、二、一九九三)、伊藤聡「天照太神・空海同体説を巡って」(『東洋の思想と宗教』十二、一九九五)を参照されたい。

(19)『神性東通記』では「奥院」は「マフン」と表記されている。当時は「おくのいん」ではなく、「おついでん」と読んでいたと考えられるが、墓廟という性格からしてもその方がふさわしい。

(20)この最極秘説の部分載せる伝本自体少ないうえに、すでに伊藤聡「天照太神・空海同体説を巡って」でも指摘されているように、載せるものも誤脱が多く、書写者が意味を正しく理解していなかったことがわかる。唯一吉原浩人氏架蔵の『両宮深秘心御柱極秘口決』のみがほぼ正しい内容を伝える。したがって、引用は吉原本によった。

「付記」本稿は一九九六年九月に行われた説話文学学会例会(於早稲田大学)のシンポジウム「神祇書と説話」における報告に訂正・加筆したものである。

なお本稿を書くにあたって、貴重な資料を利用させていただいた神奈川県立金沢文庫・高野山大学図書館・成田山図書館、および吉原浩人先生に深く感謝申し上げます。